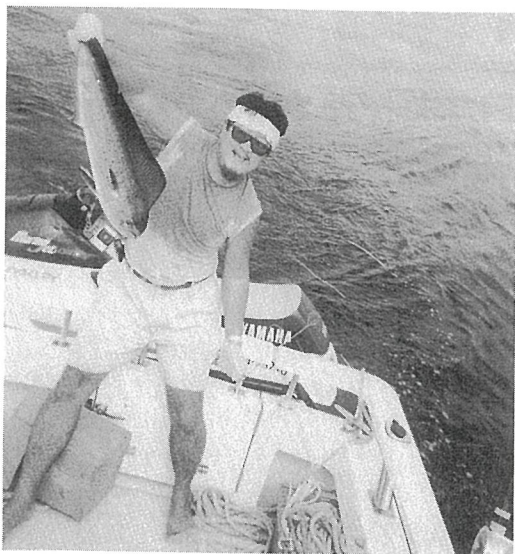


「……………クルーにサンキュー・スピーチを……………」



Satoshi Kanaumi 金海 敏

●(有)ピソー環境 代表取締役
 出身/愛知県生まれ
 血液型/A型
 信条/一期一会
 夢/最後は漁師
 好きな言葉/ありがとうの旅に、愛は広がり、
 ごめんなさいの旅に、愛は深まる。
 嫌いなこと/優柔不断



東三河支部にクルーザーを駆って毎週末、カジキを相手にファイトしている“釣キチ”がいる！広報編集委員会で出た情報を元に取材に赴いた花井さん。相手は青年部会でも活躍の(有)ピソー環境 金海社長。さっそく、釣りの話題でインタビューがスタート……！

●●●
ライン一本にかけた男のロマン

——見るからに大物を釣り上げそうな、立派なご体格ですが、釣りのご趣味はいつ頃から？
 金海「トローリングを始めて6年くらいになります。今はテレビとか本とかいろんな情報がありますが、私が始めたころはあまりなかったですね。ロッドを買えばとりあえずやれる、といったものではなく、私の相手はカジキですからね。苦労しました。」

——カジキ、というと姿形は浮かびますが、実際はどれくらいのお大きさなんですか。

金海「いろいろですが、アメリカの記録では400～500キロですね。日本だと320キロくらいだったかな…。日本の近海では120キロあれば立派なものですよ。」

——(写真を見せてもらって)きれいな流線型ですねえ。この長いくちばしが特徴ですね。これはなんて言うんですか。

金海「ツノって言ってます。」

——私は大きい魚って、魚市場でどーんと横たわってるマグロしかみたことがないんです。

金海「マグロは、われわれでも、たまにかかることがあるんですけど、本マグロ、黒マグロではなく、バチマグロ、キハダマグロですね。カジキとマグロは性格とか知能とかもまったく違って、おもしろいですよ。針にかかるでしょ。マグロはただ突っ走って逃げようとするんです。ところがカジキは頭がいい。針を何とかしようとして暴れるんです。暴れるといっても闇雲じゃなくて、潜るヤツもいればうしろへひいてみるヤツもいる。テールウォークと言いまして、おしりの方で跳ねるようにランダムに跳んで針をとろうとか、逆にこちらへ向かってくるのもあります。」

——ヘエーッ！いろんな試みをするんですねえ。個性豊かというか、知能が高い…。

金海「そうです。ゲームフィッシングの対象としては実におもしろいし、尊敬すべき相手です。頭がよくて、おおきくて、必死なその相手とライン一本の勝負ですからねえ。これはもう、気

合いが入ります。』

—大会などには、お出になるんですか？

金海『それが、まだ一度も出たことないですよ。こんな凄いシロモノと戦うんですからね、もっともっと究めて、それからでいいと思ってるんです。認定はルールを守って、現認者がいればOKですし、ゲームはいつでもどこでもできるわけです。』

—すると、個人的に船を出して、カジキにチャレンジする時も、そのルールに従って、やってるわけですか？

金海『そうです。IGFAという、スポーツフィッシング協会が世界にも、日本にもあります。その協会で定められているルールなんですね。たとえば、漁師さんみたいに、絶対切れない糸や折れない針を使えば、誰でもカジキを釣上げる可能性が出てきますよね。そうじゃなくて、スポーツである以上、キチンとルールを守って楽しくやる。これが大切なんです。』

—例えばどのようなルールが？

金海『シビアですよ。まず糸から始まります。認定されたテストラインというのがありまして、それを使うんです。ここにあるのがダブルライン（壁に立てかけてある竿を見せてもらう）。これも長さが決められていますし、ここの糸の結び目なんかも、長さが決められています。針の位置はもちろんですし、リーダーの長さ太さ

まで、こと細かです。』

—審査とか検査は？

金海『釣り上げた後にあります。これは自己申告ですからね。お互い紳士としてルールを守るというのが前提で、いわば紳士協定の上にゲームが成り立っているんです。』

—しかし、これは体力がないとできませんねえー。一日中、糸を垂れて釣果を待つのとわけが違う。

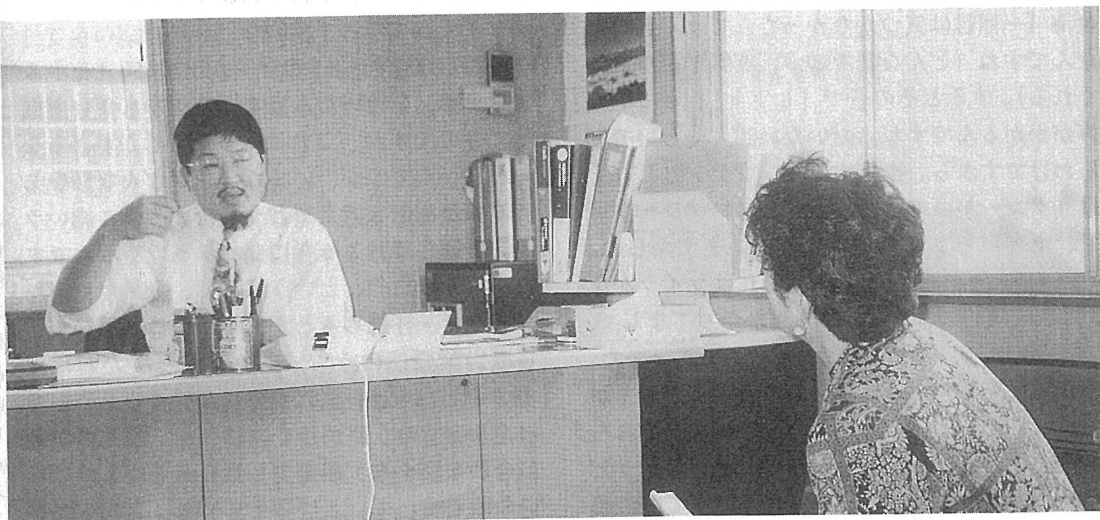
金海『基本的に、体力がないとできませんね。船のデッキにファイティングチェアというのを備えつけるんですが、体にハーネスをつける。つまり、体を使って巻き上げるんですね。カジキがかかってから釣り上げるまで一時間、二時間なんてのは、もうザラですから…。かかったからと言って釣れるとは限りません。とにかく、カジキという魚は、一生に一匹だと言われるくらいですから…。』



一生一匹!! カジキとの闘い

—一生一匹!!まさに人生を賭けるわけですね(笑)。一生一匹のカジキのために、いったいどれだけの糸や針やルアーが…。

金海『ルアーひとつにしてもですね、アメリカのビルフィッシュトーナメントで、いちばん確率の良かったルアーだと聞けば、ワラにもすが





る思いで、そのルアーを買いに行くわけですよ。そしてその時の海の色だとか空の色だとか、水温、海流、海底の地形とか、集められるだけの情報を集めてきて、これを流すんです。事前の準備はもちろん必要なんですが、海に出た以上はカンです。カジキは、決して「ここにいるよ」とは言ってくれませんからねえ。』

——それがかった時の喜びと興奮は、それこそ筆舌に尽くしがたいでしょうね。

金海『それはもう…。三重県の大王沖で船が15杯くらい、同じ海域を流してたんですが、その中でヒットしたのは僕だけなんです。三回ヒットしたんです。』

——三回!?

金海『一回目は気づかなかったんです。音はしたんですね（どんな音なのか、実際に聞かせてくれる）。するとその音で「ヒット!」っていう声がかかるんですね。だいたい四人くらいでやるわけですから。操作するキャプテンとこれを扱うクルーがいて、釣り上げるアングララーがいて、あとギャフマンというのがいますからね。それで気づかなかったから、これはシラかなと思ったわけですよ。ところがかかってまして、先に言ったようなテールウォークされちゃった。それでファイトをやりはじめる段階でカジキが船の横をシューッと抜けていって、糸が切れちゃった。水圧で切れちゃうんですね。ちょうど仲間の一人が、ほかのリール巻き上げてて、船

から身を乗り出してる目の前を行っちゃったんです。腰抜かしてましたよ（笑）。』

——で?（先を急がせる）

金海『それが悔しくて悔しくてですね、強がって「いい経験だよねえ」なんて言ってみても思い切れない。そしたら、またかかったんです…。』

——で?（結果が早く聞きたそう）

金海『45分間ファイトして、ロスト。ダメでした。』

——……………。

金海『もう、その時はですねっ、ファイトしながらほかのメンバーも、釣り上げて長さときろを測る相談をしてるわけですよ。私も「ありがとうのスピーチ」を何て言おうか考えながらワイワイやってたんです。

その時は600メートルラインが出て450メートルまでラインを巻いたんです。カジキもだいぶ弱ってきてですね、これはやった者しかわからないと思うんですが、いまカジキがどんな顔してるのか、何を考えてどうしたいのか、細いラインを通じて、こっちにもわかってくるんです。これはやったぞ、という感じで、今日はカジキのトロで一杯飲めるとか、そんなこと思いながら凄い緊張感のうちに盛り上がったわけです。そしたら、一気にラインが軽くなった。走った! っていう声がして、リールを巻くのが間に合わないから、船も少し走らせないといけないわけです。で、しばらくずーっと巻いてたん



ですが「おかしっ!!」
「ロスト!!」。みんな
ガクツです。」
——そりゃそうですね。
うー、きますよガクツ。
金海「その時の痕跡
が残ってるんですよ
(ルアーを見せなが
ら)、ここにも、こ
こにもありますが、これ

は彼(カジキ)が噛んだあとなんですね。」
——こんなにキズがつくものなんですねえ。必
死なんですねえ、彼も。さっき、ラインを通じて
カジキが何を考えてるか分かっておっしゃった
けど、彼にもわかったかも知れませんが、金海
さんの心の内が。「こいつサンクス・スピーチを
考えてやがる」とか(笑)。そのスキをついたの
かも。

金海「そうかも知れませんがねえ。」

——参考までに、考えてたスピーチの内容をお
聞きしておきましょう(笑)。

金海「えーとですね、何はともあれ握手しなが
らクルーに一言ずつ。こういう時のやり方は決
まっていますからね、ムダな言葉やムダな動きは
なくして、お礼の言葉を言う。そして、良き仲
間、良きチャンスに恵まれて、なんて(笑)。で、
いつもお世話になっている日間賀島の民宿の皆
さんと、カジキをぶら下げて記念写真を撮って、
祝賀会の段取りをして……。」

——まあ、あの大変なときにそこまで頭の中で
段取りをしてたんですねえ。ホントに好きなん
ですねえ。

金海「バカです(笑)。」

——自分でバカと言えれば、立派な道楽だと思
うんですが、その道楽に対する周囲の受入れは
いかがですか？

金海「それなんですけどねえ。船があつてこそ、
ですし、やはりお金がかかります。見方によつ
ては「社長さんは結構なご身分で」と、こうな
る。僕なんかまだ若造です。でも船を出し
て、釣りをやることを、僕はステータスだと
これっぽっちも考えてないんです。自分から人

に言うこともないです。すね。」

——人に迷惑もかけてない。

金海「ええ、まあ。金曜日になると遠足気分で、
腰は浮いておりますが(笑)。」

——それが自分自身を活性化させるなら、周囲
の見方は気にしなくてもいいんじゃないですか。
仕事の源動力になってますよ、きっと。

金海「僕は、疲れたからリフレッシュするため
に何かやるんじゃないかと、いい仕事するための
何か」として考えています。一生懸命したから
ご褒美ですよ、というのじゃない。」

——それならなおさらだと思います。すると、
これをやっている限り、いい仕事する(笑)。

いいクルーもいらっしやるし。

金海「それがですね。あれ以来、病みつきにな
りそうなのが一人いましてね。カジキが目の前
走って行って腰抜かした例の(笑)。彼が僕より
先にランディング(釣り上げる)するのだけは
絶対阻止しなきゃならない……。」

——じゃあ、良きライバルにも恵まれそうで、
ますます期待できますね。サンクス・スピーチ
の実現をお祈りしてます(笑)。

INTERVIEWER

花井 美紀

(株) コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネーター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。



「……クルーにサンキュー・スピーチを……」